

中国私立大学における日本語教育の現状と課題 －上海師範大学天華学院の事例分析を中心に－

沙 秀程*¹ 呉 素蓮*²

*¹九州女子大学 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

*²上海師範大学天華学院 上海嘉定区勝辛北路1661号 (〒201800)

(2013年6月6日受付、2013年7月11日受理)

要 旨

本研究は、中国の私立大学における日本語教育の現状と課題をめぐって、上海師範大学天華学院日本語学部を一例とし、事例分析を行ったものである。天華学院日本語部のカリキュラム設定及び教授法等の視点から日本語教育の現状について分析した。発音、語彙、聴解、会話、文法等の指導においては、実用性に焦点を当て、教授法の改革を試みた。また、カリキュラム設定に専門性・実用性のある科目がさほど多くないという問題点がみられるほか、シラバスの内容も検討する必要がある。若手教員同士の意見交換も少ないことから、教員養成のあり方も大きな課題であるといえよう。以上のような日本語教育の現状と課題に関する研究成果は、今後中国の私立大学における日本語教育の発展につながると考えられる。

1. はじめに

中国における教育改革は、1980年代半ばに入って経済体制改革と共に全面的に展開された。1950年に廃止された私立高等教育機関も再び開設できるようになった。1990年代の初めから、教育改革の波に乗り、私立教育機関が市場ニーズに対応して増え続けている。これは、「改革・開放」政策による中国の急速な経済発展に伴う社会及び国民の教育への期待と要求がますます高まったことにより、教育体制・形態の多元化が求められ、かつそれが可能となっているからである。私立高等教育機関は雨後の筍の如く新設され、その著しい発展は中国の教育に大きな変化をもたらしている。

上海師範大学天華学院（以下、「天華学院」と称する）は、このような時代を背景に、2005年に上海師範大学の「独立学院」¹として創立され、学位授与権限を有する4年制本科

¹ 独立学院とは修士学位の授与権を持つ国公立本科大学と社会の力（企業、事業体、社会団体又は個人とその他協力能力を有する機構）が連携して開設した高等教育機関を指す。法人格の独立、学生募集の独立、キャンパス・施設の独立、教育運営・管理の独立、独立採算、卒業証書の独立などが特徴である。母体大学の学科、教員、設備の諸条件や運営経験等の強みを生かし、かつ本科レベルの教育を実施しているため、「裸一貫で事業を興し」、かつ専科レベルが中心の民間大学に比べると、社会的な認知度と就職面での競争力が明らかに高い。

教育の高等教育機関である。日本語学科は設立当初の6つの学科の中の一つであり、まだ歴史が浅く、試行錯誤しながら私立大学における日本語教育に積極的に携わっている。

本研究は、中国の私立大学に設置された日本語学科のカリキュラムや教学面について、現地調査を踏まえてその現状と特徴を明らかにし、さらに中国社会の現状と照らし合わせながら、天華学院のような私立大学における日本語教育の抱える課題について考察するものである。

2. 天華学院日本語学科のカリキュラム

天華学院は、次世代を担うグローバル人材の育成を目標に設立されたものである。当該学科が掲げる目標は下記の通りである。

本学科は確実な日本語力と広範な科学文化の知識、すなわち外交、貿易、文化、新聞、出版、教育、科学研究、観光等の分野において翻訳、研究、教授、管理業務に従事することのできるハイレベルかつ専門的な日本語を身につけた人材を養成する。

学生に対しては下記のような言語、文学並びに人文・科学技術方面の基礎知識を理解することを求める。

- ・ 充分な異文化間コミュニケーション能力を身に付ける。
- ・ 確実な日本語力を取得し、読む、書く、聞く、話す、翻訳する能力を身に付ける。
- ・ 我が国の国情と日本の社会や文化を理解する。
- ・ 第二外国語を現実に応用できる能力を身に付ける。
- ・ 論理的思考力、創造力、ビジネス能力及び実際の業務遂行能力を身に付ける。

また、下記の資格の取得が望ましいとされている。

- (1) 日本語能力試験2級 (日本国際交流基金実施)
- (2) 専攻日本語能力試験四級 (中国教育部日本語指導委員会実施)
- (3) 大学英语能力試験四級 (中国教育部英語指導委員会実施)
- (4) 大学パソコン能力評価試験 (上海市教育局試験センター実施)
- (5) 日本語能力試験1級 (日本国際交流基金実施)
- (6) 専攻日本語能力試験八級 (中国教育部日本語指導委員会実施)
- (7) 大学英语能力試験六級 (中国教育部英語指導委員会実施)

卒業までに修得しなければならない合計単位数は164単位であり、そのうち、日本語教育に当たる部分は107単位、総授業時間数は2110時間が当てられている。これは日本語能力試験1級の認定基準に示される900時間という学習時間に比べればかなり多いが、日本語使用環境ではない海外の学習機関で十分な教育を行なうためにはこのくらいの時間数が必要だ

といえる。

以上見てきたように、天華学院日本語学科は非常に多くの授業時間を日本語教育に当てており、そのほとんどが必修科目、かつステップ履修科目である。とりわけ、1・2年次の日本語教育は集中的に行われている。入学直後のゼロ初級からの2年間は専ら日本語の習得のために精読を中心に据えており、会話と聴解により「話す」ことと「聞く」ことの能力を育成している。これは学生が即座に日本語で反応できるようになることを目標にして、組み立てられたコースデザインであり、3・4年次になってから「考える」ことを伴う新聞講読や作文の授業が配置されている。

3. 教育・指導の実態

3-1 専攻科目

「基礎日本語（一）（二）」は日本語学習の中心となる科目で、内容は主に「精読」授業を通して、発音、語彙、文法、読解等、総合的に指導する科目である。2年後期までのメインテキストは『新編日語1～4』（上海外国語教育出版社）である。これは日本語初心者を対象にした教材で、レベル的には、語彙、文型、読解において日本語能力試験の2級程度までをカバーできる内容となっている。1課の構成は、本文、会話、応用文、単語、言葉と表現（文法・文型）、ファンクション用語（機能別の日本語使用例）、練習からなっている。中国語は単語の意味解釈と文法・文型の解説以外は用いられていない。練習は、漢字の読み、短文レベルでの穴埋め、本文・会話・応用文の内容に対する質問、中国語から日本語への翻訳および日本語から中国語への翻訳という構成である。各新出単語にはアクセント記号も明記されている。扱う内容は日本語や日本人・日本文化についての話から、ニュースや環境問題に関するものまで幅広い。始めのうちは学生の母国語である中国語を用いて解説・説明や学生への指示を行うが、徐々に日本語の使用を増やし、最終的には授業中の使用言語を（教師、学生ともに）100%近く日本語のみに行うようになっている。教室の外へ一歩出れば外国語はほとんど使われない環境の中で日本語を身に付けさせるためには、このくらいの厳しさと緊張感が必要だと考えている。日本語教育の根幹となる部分をベテランの中国人教員が担当し、2年間で確実に学生を日本語能力試験2級レベルまで導くことができるようにしている。

メイン科目「精読」のほかに、「聞く」「話す」「書く」「読む」という応用技能を伸ばすために日本語聴解、会話、作文、新聞講読、日本事情、日本文学などの授業が開講されている。聴解、日本事情、日本文学などの科目担当は中国人教員であり、会話、作文、新聞講読などの担当は主に日本人教員である。また、メインテキストを除き、これらの教材の選択採用もシラバス作成もその年度の各担当教師に任されている。

このように、メイン科目である「基礎日本語（一）（二）」以外の日本語関連科目は、「基礎日本語（一）（二）」で学習した内容を聞いたり、話したり、書いたりすることによって再

確認し、修得した知識を活用できるための補助的役割を果たしていると言えよう。

3-2 指導法

天華学院は設立されてからまだ10年過ぎていない。しかし、従来の教授法、指導法などに捉われず、様々な方面において積極的に改革の試みを行おうとしている点が伝統のある大学と異なっており、大学の特徴となっている。天華学院日本語学科において、若手教員も、中堅ベテラン教師も、各自の担当科目の指導法について常に研究し、改善しようという姿勢を、この研究調査を通して見ることができる。

3-2-1 発音指導

発音は外国語の学習において極めて重要であると言える。したがって、発音のひとつひとつの仕組みを取り上げて訓練することや、各単語におけるアクセントの形の指導をすることも、外国語学習の導入において必要不可欠であろう。

もともと発音は母語の影響を受けやすく、また個人差も大きい上に学習者のモチベーションも異なる。それ故に、これらを一括して指導することには難しい一面も否めない。一般的には、クラス指導と個別指導の両方を併用することで一定の効果が生まれると考えられる。

現実的には、天華学院日本語学科の学生の大半は、上海以外の地方出身者であり、訛りの影響から標準中国語発音（教育部指導基準）も満足に表現できない。外国語の日本語になると、問題はなお更深刻である。五十音図の指導にあたっては、「ナ」と「ラ」、「ガ」と「ア」の発音が其の方言の影響によって区別できず、聞き違える学生が非常に多く、これらも指導上の難点を構成する一因となる。

このように正確に発音できない学生には、その単音だけに拘ることなく、短い挨拶をやや早いスピードで発音させ、文レベルで音を聞き取るという指導法が考えられる。実際の授業で実施してみたら、確かに一つ一つの音を発声するより、接続文を用いた発音練習法が却ってよりよい効果を生み出せることが判明した。この接続文発音法は、地方なまりの克服に苦勞する学生にとって、励まされることで、「できた」「褒められて嬉しかった」という自信が生まれ、同時に学習上の心理負担も解消できるようになる。例えば、「ナ」と「ラ」、「ガ」と「ア」の発音に困難な学生には、次のような発話練習を行わせることにより、効果的な指導ができるだろう。

例1 ごあんな（ラ）いします。

例2 こちら（ナ）こそよろしくおねがいます。

例3 ありが（ア）とうございます。

上記のように、例1の「な」を「ら」、例2の「ら」を「な」、例3の「が」を「あ」と発音し、多少不自然に聞こえていても、コミュニケーション遂行上に基本的な支障さえなければ、まずそれを認めることにする。それにより認められたという評価は更なる学習意欲を加速させることになる。つまり、教師は、その言葉の意味を理解できる範囲なら、学習者の話

を打ち切ったり、繰り返して直したりすることは避けたほうがよいであろう。また、学生にとって、すぐにでも役立つような日常用語や教室用語を表現できたことにより、湧いてきた自信がさらなる学習意欲を引き出せるだろうと思われる。

実際の学習現場では、学習者の多様な反応が出るので、それらに対し、前述のように、連接句を用いた正確な発音を強調し、その指導に対応することで更なる効果アップが期待される。日本語の発音を自国語の発音との区別を留意させ、その特徴を理解させた上で練習を重ねていくなら、聴解能力も今まで以上に向上できると思われる。

3-2-2 語彙指導

語彙は一言語を構成する、謂わばレンガのようなものであって、語彙学習を無視しては外国語を習得することはとうてい不可能である。毎年の日本語能力試験に必ず語彙の問題が大きなウエートで出題されており、したがって語彙の学習は重要な課目内容となる。

中国の大学では、学生たちに語彙を如何に効果的に習得させるかは日本語教師にとって基本的要務である。以下、語彙指導において、従来の教え方、学生の語彙習得の問題点、新しい試み、の三つの面にわたって、天華学院日本語学科の若手教員の教育実践を見てみよう。

(1) 従来の教え方

新しい一課に入ると、まず新出単語から勉強するのが普通である。単語には、表記（漢字の書き方、振り仮名、送り仮名）、発音（アクセント）、品詞、意味、使い方などの要素がある。指導するとき、これらの要素を逐一学生たちに教えるのが通常のやり方である。例えば、「痛める」を例にすると、次のように指導する。

表記：痛める

漢字：痛

振り仮名：いた

送り仮名：める

アクセント：③

品詞：動詞（他動詞、対応する自動詞は痛む）

意味：①（肉体的に）使疼痛（痛くする）、②（精神的に）使痛苦（苦痛を与える）

使い方：①足を痛める、②心を痛める

(2) 学生の語彙習得の問題点

語彙習得の過程においていくつかの問題を抱えている。よく指摘されるのは、学生が単語を暗記しようとしなない、もしくは、学生が単語を暗記するが、使えない、などである。暗記しないのはいたいが学生の怠惰によるものであって、テストなどを行うことにより学生に暗記する気を起こさせるなどの努力をする必要がある。暗記はするが、実際にはなかなか適切に応用できないというのは、日本語学習における難課題である。今、初級段階の語彙指導法として以下のような試みを実施されている。

(3) 新しい試み

学生たちに単語を覚えやすく教えるためには、言葉による説明だけではなく、絵パネルなどを通じて教えたほうが効果的になることがある。特に名詞の場合、絵や写真を見せることによって、より直感的になり、インパクトがあるから単なる言葉による説明より脳に焼きついて、覚えやすくなるのである。

単語の使い方を説明するため、いい例文が必要不可欠である。例文も短いフレーズから、長いセンテンスまで、バラエティに富んだものが望ましい。

単語の使い方として、例文のほかに語用論の観点からの説明も必要である。例えば、この単語を使うのは、だれ、いつ、どこ、どんな文体か、などである。こういう単語の知識も習得させてはじめて単語が生き生きとして使えるようになるものである。

3-2-3 聴解指導

第二言語を習得するには、話す・読む・書くことに加えて、聴解能力の養成も避けて通れない。日本語能力試験で何が一番難しいのかと聞いたら、「聴解」と回答する学生が多数に上る。ここでは、天華学院で実施されている初級日本語レベルの聴解教授法について4項目に分けて考察してみる。

- 1) 音素の聴き取り：音素対立の聴き取りとはたとえば、「の」と「ろ」、「続く」と「突付く」、「百」と「飛躍」、「定期」と「敵」などのように、ミニマル・ペアを作って、「n」と「r」、「ts」と「dz」などのような対立音素に重点を置かせ、その違いを聴き取る練習をさせ、聞く習慣を身につけさせる方法である。
- 2) 単語の聴き取り：単語の聴き取り段階では、長音と単語、清音と濁音、促音、母音の無声化、またアクセントなどの聞き取り、発音の練習も行う。指導方法として音声の響きに合った単語、あるいは意味を選ばせたり書かせたりする。そして学生同士も組み合わせをして、互いに学びあい、共同学習を進める。
- 3) 文の聴き取り：文レベルでは、音素、単語レベルと比べて、もっと多くの音韻の微妙な変化（たとえば連濁、ガ行鼻濁音、アクセント）が生じるのである。また、インタネーションも文の解釈にも大きな影響を与える。聴解の面において問題となるのは、①述語の位置、②主語の不在、省略、③助詞、助動詞、④同音異義語であるが、これらの点を注意、強調しながら、会話を交えて教育することが効果的であり、学生たちの学習意欲向上にも繋がる。
- 4) 長文レベルの聴き取り：こういう段階では相談、連絡のような日常会話や、講義、ゼミの発表、スピーチのような、あるテーマに関してのまとまった話など、広範囲の話題が取り上げられる。問題の設置は、数枚の絵を時間の順に並べたり、選択肢の中から、または絵や図表の中から、聴いた内容と同じものを選んだりさせる、などである。指導方法として、文の繰り返し、穴埋め、ポイントの掴み、大意のまとめなどを通して会話や文章を理解させる。また学生たちに場面に応じて会話を作ったり、テーマの発表をしたりといった

練習をさせて聴解と共に会話能力の向上も狙う。

聴解指導のとき、教材の形式にこだわらず、アニメ、テレビ、また日本の童話など、簡単に初級レベルの学習者にふさわしい内容を取り入れている。能力試験に慣れるために、初めから模擬テストおよび過去問題も利用してトレーニングしたり、また聴解試験に出る単語、文型、文法、そして質問の設置などをよく分析して、そういった単語、文型を使い、聴解、会話の素材を作ったりするのも聴解学習法の一つだと思われる。

3-2-4 会話指導

海外における日本語教育の現場では、学習者は日本人との接触が少なく、日本語学習の機会も時間も制限されているなど、学習リソースが不足しているのが現状である。また、教室で教師からの一方的な授業になりがちであり、学習者の言語運用能力をなかなか育成することができない。「教室では習ったが、どんな場面でどう使うかよく分からない」「生きた日本語をしゃべりたい」といった学生の声に応え、天華学院日本語学科は、現在、会話授業で「タスク型」教授法を実施している。それは教師が予め「正しい」日本語を規定して、それを学習者に提示するという従来のやり方とは違って、学習者は既に持っている知識、体験を生かして、自ら学んで、教師はその「学び」を支援するという授業方法である。授業では、常に心がけていなければならないことは次の3点である。

- (1) 学習者一人一人が積極的に参加すること
- (2) 学習者の発話量を増やすこと
- (3) 学習者同士及び学習者と教師とのインターアクションをとること

授業では、まず、学習者一人一人が参加できるように、もともと大人数のクラスを1グループ2、3人ぐらいでグループ分けをする。ここで、肝心なのはグループの分け方である。自由選択だと、仲のいい友人同士で組んでしまいがちで、毎回同じ相手と会話の練習をすることになり、結局、お互いにある程度話の文脈ができていて、言葉が適切でなくても意思疎通ができ、満足な練習にはならない嫌いがある。そうならないように、くじ引きでグループ分けするようにしている。

教師は予め、もしくは即席で、ある「タスク」を学習者に与え、そのタスクをどのように達成するか、グループ単位で考えさせる。一例として、「天華学院のキャンパス案内」というタスクを紹介したい。キャンパス全体をいくつかのスポットに分けて、グループに割り当てる。学習者は自分が担当するスポットについて、事前いろいろ調査したりして、必要な情報を手に入れる。次回の授業では、それぞれガイドになったつもりで、キャンパスを案内する。そうすると、学習者のやる気を引き起こして、既に持っている知識、体験をもとに、タスク達成に積極的に取り組むようになる。また、こういう「タスク型」授業を通して、日本語の勉強だけでなく、クラス全体の人間関係の構築、大学への愛着にもつながるのではないかとされている。

3-2-5 文法指導

文法指導にあたって、「図式教授法」という指導法を試みている。「図式教授法」とは、ダイアグラムを利用し、知識の概念や事象を解明する教授法である。具体的に言えば、文法における図式教授法は文法概念、関係や特徴などを図式によって表現し、簡潔で効果のある教授法だと評価されている。ここで当該学科の教員が実際に使っているいくつかの実例を考察しよう。

実例1 動詞のアスペクトの分類についての図式

図1 例：作る（継続動詞）

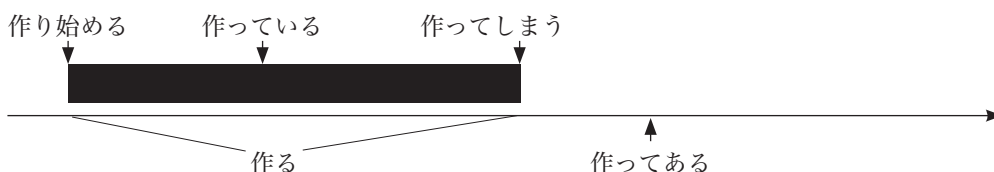
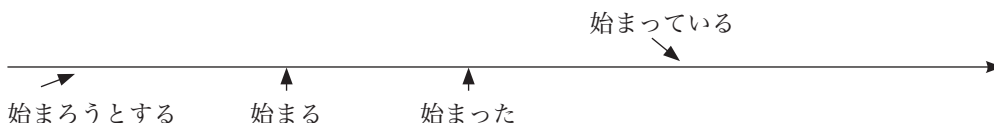


図2 例：始まる（瞬間動詞）



日本語のアスペクトは中国語の「時制」と違い、独自の特徴がある。中国語の母語影響を受け、中国の学習者はよく「～ている」を時制の「現在進行形」と混同する。実際、「進行」自体は時制ではなく「相」（アスペクト）であるから、「進行相」というのが適切である。進行相はさらに厳密には、主語が行為をしている状態を表す「継続相」（日本語でいえば「～ている」）と、行為・現象の動的な性質（完了に向けて進行中）を表す「進行相」（「～ていく」「～つつある」）の2つの相に分けられる。

図1と図2を見て分かるように、「ケーキを作っている」は、出来事が継続していることを表しているが（進行相）、「授業が始まっている」のように、「ている」が瞬間的に変化する動詞につけられた場合、変化の結果が持続していることを表している（結果相）。「～ている」は一概に「進行」を表すとは限らない。図式によって、継続動詞と瞬間動詞はアスペクトにおける区別ははっきり示され、学生もアスペクトの特徴を習得しやすくなる。

実例2 授受動詞の分類についての図式

基礎日本語の7種類ある授受動詞は3組に分けられる：

- ①くれる、くださる
- ②やる、あげる、さし上げる
- ③もらう、いただく

①組は「ソト」から「ウチ」への授けを表す(図3)。②組は「ウチ」から「ソト」への授けることを表す(図4)。③組は「ソト」から「ウチ」への受けることを表す(図5)。日本語では、「ウチ」と「ソト」は相対的な概念であるため、「私、話し手、内の人」の授けることは②組の授受動詞を使うのに対して、「彼、第三人称、第二人称のあなた」の授けることは①組の授受動詞を使う。単なる文字や言葉を使って説明しては、学生には分かりにくく、かえって混乱を招いてしまうことがある。図式で示すと、どちらが授ける方か、どちらが受ける方か、公式のように一目瞭然になっている。教育現場では、学生に自分で文法図式を設計させ、能動的に積極性を発揮させれば、クラスの学習雰囲気も改善され、学習効果も向上すると言われる。

図3：

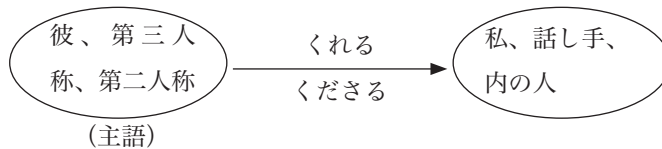


図4：

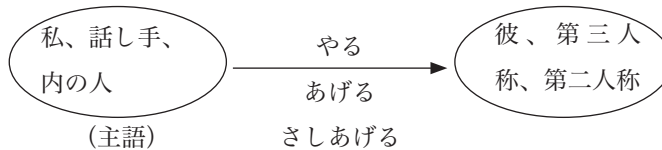
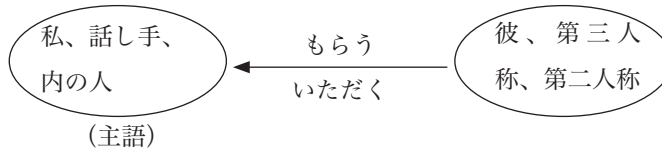


図5：



以上のように、天華学院日本語学科の発音指導、語彙指導、聴解指導、会話指導、文法指導と教師の教育実践を見てきたが、教師自身が授業で何を求めるか、目標達成するには何をすべきかを検討してみることは、本人の授業改善そして教授法の向上へとつながるものだと思う。より効果的な指導法を工夫すれば、授業中良い刺激を受けた学生の反応も大きくなり、教室の雰囲気も良くなり、さらに学生のやる気も引き出せるであろう。また、教室以外の場所でほとんど日本語を使う機会のない学生に適切にフィードバックすることも重要な課題である。

要するに、上述のタスク型、図式教授法や絵パネルなどメディアを通じた教え方は、いずれも心理学をも活用したものと言えよう。また、90年代後に生まれ、アニメや漫画の世界に育てられてきた「新生代」とっては、メディアは視覚の楽しみばかりでなく、入手しやすい情報手段の一つでもある。

4. 天華学院における日本語教育の課題について

4-1 カリキュラム

中国の大学における日本語専攻科は、従来までの実用本位の外国語教育から①日本語学の専門性の確立へ、②日本語以外の専門的知識の習得へ、という二つの流れが生まれつつあるという。①の流れでは日本語を体系的な学問として位置付け、今までの運用能力に加えて日本語の理論・知識を身に付けさせようというものである。

現在の天華学院日本語学科カリキュラムでは、このような日本語という科目は、文法教育を中心に示しているに過ぎず、体系的な専門科目の配置が欠けていることは明らかである。学生や社会のニーズがいまだ実用本位であり、今後しばらくはこの状況が変わらないことが予想される。

また、実際、日本語学習が抱える問題として、単位積み上げ型のカリキュラムでは、他学部の講義を履修して、もう一つの学士号(デュアル デイグリー)を取得することは事実上不可能である。

以上のような事情から天華学院の日本語科は「従来型」の学としての日本語教育が続けられてきたのである。しかし、学科目標に掲げられた「ハイレベルの日本語力」を身につけた、実社会で活躍できる人材の養成を目指すのであれば、履修科目の中に異文化間コミュニケーション関連科目や社会心理学などの科目も設置する必要があると考えられる。また、日経新聞などを読みこなせるような商業・経済日本語科目、ガイド日本語などを選択科目として開講すべきであろう。

大学教育全体が総単位数を縮減する傾向にある中で、何を必要な科目として残し、また限られた授業時間数でどのように学生の日本語力を高めていくのか、そして、一私立大学である天華学院としてどのような人材を育てていくのかは、今後の大きな課題である。

4-2 シラバスの問題

天華学院日本語学科の開講科目のうち、「基礎日本語」は使用テキストから見てそのシラバスは構造シラバスである。その他の「会話」「聴解」「作文」および「総合日本語」についてはそのシラバスは明確でなく、毎年担当教員の裁量で授業が進められている。しかし、これらの科目は必修科目であり、日本語応用能力を高めることに直結する授業であるため、本来は学科レベルで入念に検討した上でシラバスを決定するのが適切だと判断される。

現行の構造シラバスには、以下のような長所がある。

- (1) 学習項目がはっきりしており、一つずつ学んでいくことができる。
- (2) 基本的に簡単なものから難しいものの順に学習でき、学習者の負担が少ない。
- (3) 文法的に高度な日本語を学習することができる。
- (4) 「易→難」になっているので、絵などのほかに、既習の文法項目だけを用いて新しい文法項目を導入することが比較的容易で、直接教授法を用いても教えやすい。

しかし一方、構造シラバスには次のような欠点もある。

- (1) 教室外で学習者が実際に必要とする表現がなかなか学習項目として出てこない。
- (2) 文法は理解し覚えたが、実際には使えないということが起こりやすい。

構造シラバスの欠点を補うような場面シラバス、機能的シラバスなどを導入することが、日本語運用力を高めるために有効であると考えられる。そのためには、それに適した教材・テキストや、担当教員全員のコンセンサス、そしてコースデザインができる日本語教育専門家が重要となってくるが、いずれも現在は充分ではないのが現状である。しかし、今後総単位数の削減に伴い、授業時間が減少する中で、現在のような担当教師任せのシラバスでは学習効率が落ちてしまい、卒業時の学生の日本語レベルが目標通りに達するのは困難であることが予測される。その解決策の一つとして、日本語科目相互の関連を考えたシラバスデザインを組み立てることが望まれる。

4-3 教師に係わる問題

天華学院日本語学科の教員は、若手教員と中堅ベテラン教員は、ほとんど主要大学の大学院出身である。しかし、教員の大半を占める若手教員は日本語教育に携わる経験が浅く、効果的な指導法については、それぞれ個人任せ、手探りで試行錯誤しているのが現状である。また、各教員が自分の所属する一つの領域に閉じこもり、教員間の交流が少ないようである。現場教員による教材開発においても、スムーズにいかず、遅滞にある現状は否めない。さらに、国立大学と比べて、私立大学教員では、処遇面や待遇面で一定の差が見られ、その結果、教員の離職率の高さへと繋がっている。従って、今後、若手教員の育成、安定した教育現場の維持を考えると、解決課題として、避けては通れない問題となっているようである。

5. おわりに

創立して8年目を迎えた天華学院日本語学科は、比較的短期間で様々な面で立派な成果を成し遂げてきたと言える。若手教員の海外における国際シンポジウムへの参加及び上級日本語教育の研修班での再教育などから、新しい教育理念や教育改革に関する情報も大量に入手可能となり、自らの実力と其の認識も改めて見直すようになってきた。また、目の前の教壇しか見ない者から、幅広い視野を持つ教育者になる変化も見えてきている。日本語教育に関する論文数も増え続けている。しかし、教材開発においては、相対的にまだ遅れている。当該学科の学生の特徴に適し、社会ニーズに応じてまず実用性の教材作成に力を入れるべきだと考えられている。そして、グローバル化している今日では、より幅広く国際交流を展開すべきではなからうか。

今後は、天華学院における英語教育の現状が、日本語学科とどのように異なっているのか、また共有する問題点では如何かについても、調査を行い、中国の大学における外国語教育への取組みと日本語教育の現状と課題について、更に考察を深めていく必要がある。

参考文献

- 1) 小川芳男 林大 他編集 (1982) 『日本語教育事典』大修館書店
- 2) 岡崎敏雄 岡崎眸 (1990) 『日本語教育におけるコミュニカティブ・アプローチ』凡人社
- 3) 日本語教育学会編 (1995) 『タスク日本語教授法』凡人社
- 4) 青木直子 (2001) 『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社
- 5) 石田敏子 (2001) 『日本語教授法』大修館書店
- 6) 牧野成一 鎌田修 (2001) 『ACTFL OPI入門』アルク
- 7) 尹 松 (2002) 「第二言語・外国語教育における聴解指導法研究の動向」『言語文化と日本語教育』
- 8) 国際交流基金 (2003) 『海外の日本語教育の現状』凡人社
- 9) 梅村 修 (2003) 「日本語の聴解指導－聴き取りを容易にする“知識”とは何か－」『帝京大学文学部紀要教育学』28
- 10) 横山紀子 (2008) 『非母語話者日本語教師再教育における聴解指導に関する実証的研究』ひつじ書房

Japanese Language Education in Private Chinese Universities: A Case Study of Shanghai Normal University Tian Hua Institute in Shanghai

Sha XIUCHENG^{*1}, Wu SULIAN^{*2}

^{*1}Kyushu Women's University

1-1,Jiyugaoka,Kitakyushu-shi,807-8586,Japan

^{*2}Shanghai Normal University Tianhua College

1161North Shengxin Rd, Jiading District Shanghai, 201800, China

Abstract

The article deals with the state of the current Japanese language education in private colleges and universities in China, using the Japanese Department at Tian Hua Institute of Shanghai Normal University as a focal point for a close examination. It offers a close look at the various aspects of the Japanese language teaching at Tian Hua Institute: curriculum; teaching methodology; innovations in teaching phonetics, vocabulary, grammar, listening and speaking with a purpose to cater to the individual students' learning styles; and implementation of all the innovations in real teaching practices to see how they affect learning. In addition, the article points out some existing issues in Japanese language teaching, such as the lack of specialized and highly practical content in the curriculum, the lack of clarity in lesson outlines, the inadequacy of professional exchange among the young and inexperienced instructors, and the necessity to train more qualified young instructors. Hopefully, this examination of the current state of the Japanese language teaching at Tian Hua can assist all private institutions in China to improve their teaching and learning of Japanese language.

Keywords : Japanese language education, Tian Hua Institute, curriculum; teaching methodology; innovations